

# 金文からみた中国西周青銅器

蔀 淳 一

## はじめに

我々が毎日使っている漢字の最初のものとしては、今から3,300年くらいまえ殷（商）時代後期の甲骨文が有名である。ところが、ちょうど同じころ、青銅器にも文字が鑄込まれはじめていた。金文である。見比べてみると甲骨文と金文とでは同じ漢字とは言いながら印象がずいぶん異なるのであるが、それは甲骨文が彫刻刀のようなものでかたい亀甲や牛の肩胛骨に刻み込む都合上直線的にならざるを得ないのに対し、金文は粘土を形どって鑄型（凸型）をつかって鑄込むため装飾性を帯びさせ得たことによると考えられる（第1図）。

殷時代にはじまる金文は、つぎの西周時代に至って大いに発展を遂げる。すなわち、長文の金文が数多く生み出された。殷時代の金文が長いものでも30字前後であるのに対し、西周時代の金文には500字近いものがある。すでに韻をふんで文章をつくることをはじめられている。このように長文の

ものがふえた原因は、記念してつくられる青銅器が多くなったことによると思われる。長文の西周金文をみると、鑄込まれた青銅器をつくるに至った経緯について多くの字数を費やして記しているからである。

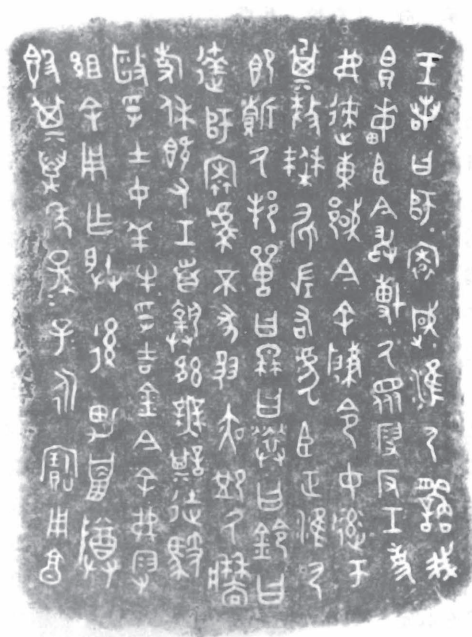
金文の鑄込まれている西周時代の青銅器には、およそ20前後の器種がみられる。これらの器種は後述のような体系をかたちづけていたと思われる。記念の青銅器をつくるにあたって、どのような器種の器にするのかということが、当然、考慮されていたにちがいない。では具体的にどのような器種が選ばれていたのか。比較的長文である字数50字以上の西周金文をもとに調べてみたい。

資料は、現在、最も良く西周金文を網羅している白川静氏の『金文通釈』に主として拠るが、『金文通釈』完結後に出土した西周金文を補った。

あわせて、調べた結果について、不十分であるが、考察を加えたい。



甲骨文



金文

### 1. 西周金文と器種とのつながり

字数50字以上の西周金文を数え上げていくわけであるが、その際に、つぎのようにした。

列鼎あるいは列設のように全く同じ金文を持つ同じ器種の青銅器が何点かある場合には、そのうちの1点だけを数える。尊と缶のように同じ金文を持つ異なった器種の青銅器のセットの場合は、それぞれ1点ずつ数える。サビなどのために金文の一部が不明で字数をはっきりと知ることができないものは、その数7点であるが、およその字数を判断して数え上げる。

こうして数え上げた字数50字以上の金文を持つ西周青銅器は、159点にのぼる。内訳は、つぎのとおりである。括弧内に記すのが器種である。

食器 5器種 115点

烹煮器 38点 (鼎37点, 甗1点)

盛食器 77点 (殷69点, 孟1点, 簠7点)

酒器 6器種 30点

温酒器 3点 (盃3点)

盛酒器 26点 (尊8点, 缶7点, 方彝5点, 壺6点)

飲酒器 1点 (觶1点)

盥器 3器種 8点

(盤6点, 匜1点, 方鑑1点)

樂器 1器種 6点

(鐘6点)

なお、盥器に記す方鑑は、いわゆる虢季子白盤のことである。深い器であることからして、盤ではおかしく鑑とする。

50字以上の金文が鑄込まれている西周青銅器の器種数は15であることがわかる。西周青銅器の器種の主なものとしては、この15のほかに烹煮器の方鼎と鬲、盛食器の簠と豆、盛酒器の壺といったところがある。

50字以上の金文を持つ器の点数が多い器種は鼎と殷である。断然ほかの器種を引きはなしている。この結果、115点と、159点中に占める食器の割合が圧倒的に高い。鼎と殷とを較べてみると、殷の方が多く、鼎の約2倍もの点数にのぼっている。

つぎに、分析の角度を変えて、50字刻みにランクを設定して、字数の多寡による器種との結びつきをみてみたい。

50字以上100字未満 11器種87点

鼎 21点 殷 37点 簠 3点 盃 2点

尊 4点 缶 7点 方彝1点 壺 4点

觶 1点 盤 2点 鐘 5点

100字以上150字未満 12器種48点

鼎 7点 甗 1点 殷 25点 孟 1点

簠 3点 盃 1点 尊 2点 方彝3点

壺 1点 盤 2点 方鑑1点 鐘 1点

150字以上200字未満 7器種13点

鼎 2点 殷 5点 盥 1点 尊 2点

方彝1点 壺 1点 匜 1点

200字以上 3器種11点

鼎 7点 殷 2点 盤 2点

これでみると、西周金文のうちで字数150字以上の長さのものは極めて少ない。その数は、50字以上150字未満の長さのものの総数の5分の1足らずである。

やはり、4つのランクのいずれにおいても、鼎と殷の点数が圧倒的に他の器種の点数を凌ぐ。鼎と殷に絞って比較すると、200字未満では殷の点数の方が鼎の点数を上回るのであるが、200字以上では、この関係は逆転して、鼎の点数が殷の点数より優っており、倍以上にのぼる。

そこで、200字以上の金文を持つ西周青銅器を更に細かくみてみると、つぎのようである。

200字以上250字未満

鼎 1点 (禹鼎), 殷 2点 (師詢殷・牧殷)

250字以上300字未満

鼎 3点 (多友鼎・大克鼎・大盂鼎), 盤 1点 (史牆盤)

300字以上350字未満

該当する金文を持った西周青銅器なし

350字以上400字未満

盤 1点 (散氏盤)

400字以上

鼎 3点 (小孟鼎・晋鼎・毛公鼎)

字数250字以上では、鼎がはっきりと殷に対して優位に立っている。盤2点が目立つが、これは、盤が西周青銅器中で重要な器種として看做されていたというよりは、盤の広くて平らに近い内底面が長文の金文を鑄込むのに楽であったためと思われる。

ちなみに、殷および西周時代の青銅器の金文は、爵の仲間をのぞいて、器の内側すなわち内壁や内底、あるいは蓋の内面に鑄込まれている。爵の仲間においても把手のかげ、付け根のあいだに隠れ



るように鑄込まれている。いずれにせよ、オモテに顯示するかのように鑄込まれていない。なぜそのような場所が選ばれているのかは、わからない。金文が見づらかろうと思うのであるが。

## 2. なぜ鼎と殷が尊ばれたか

本論に入る前に、鼎と殷について、少し説明を加えたい。

西周青銅器20種前後のうちで、鼎と殷は最も代表的な器種である。その製作点数は、断然ほかの器種の追従を許さない。たとえば、郭宝鈞氏の『商周銅器群綜合研究』には1949年以降に墓葬や窖穴（穴倉）から出土した西周時代の群青銅器が聚成されているが（同書中64～66頁の表六「西周銅器群統計表」）、そこで聚成されている西周青銅器の総数304点中、鼎は45点（15%）、殷は59点（19%）を占めている。鼎のつぎに多いのは尊の19点である。今まで特に述べて来なかったが、西周青銅器の中には、字数50字に満たないものや、全く金文の鑄込まれていないものが数多くある。郭氏の聚成はこれらの西周青銅器を含めている。

すでに述べたように、鼎と殷はともに食器である。食器の中でみると鼎は煮煮器すなわち食物を煮炊きして調理する器であり、殷は盛食器すなわち食物を盛って食事に供する器である。鼎の一般

的なかたちは、第2図のごとくで、ほぼ半球形の器に3本の足と一對の立耳がつく。その器部の丸い外底と3本の足にススのついている鼎の報告例は少なくない。鼎を使って煮炊きした食物の種類は、墓葬に副葬された鼎の中に獣骨が見つかる例がけっこうあることから、動物の肉であった可能性が高い。ここで注目されるのは、鼎で煮炊きした肉を盛るにふさわしい器種が西周青銅器20種前後のうちに見当たらないことである。肉を煮炊きすればスープができる。ふつうに考えれば、肉とスープは分けずに一緒に食べるであろう。鼎が煮煮器であってなおかつ盛食器であってもおかしくない。このような鼎に対して、殷は、第3図のごとくで、ほぼ半球形の器に一對の耳と圈足（高台）がつくのが基本のかたちである。鼎とちがって形態に変化がかなりみられ、蓋がついたり、耳に環がついたり、圈足の下に本来の器と並ぶほどの箱形の飾り台がついたりする。盛食器としてこの殷に盛られたのは、黍・稷・稻・梁などの穀物であったと文献および「殷」字の字形から言われる。

さて、こうした鼎と殷が数ある西周青銅器の中で尊ばれたのはなぜであろうか。

今まで述べて来なかったが、西周青銅器は、主として祖先祭祀に用いられていたと考えられる。



第2図



第3図



その器をもって祀られる祖先の名を金文として記した西周青銅器は少なくない。ここで取りあげた字数50字以上の金文を持つ西周青銅器も、そのほとんどが用いて祀る祖先の名を記している。まへの殷時代の青銅器も主に祖先祭祀に用いられた。

こうした祖先祭祀とのつながりを追っていくと注目されるつぎのような事実に出遭う。

この小文の冒頭に述べた殷時代の甲骨文によれば、殷の王室では、王室の今は亡き祖先たちに対して、数々の祭祀をおこなうとともに牛と羊を代表とする動物を犠牲として捧げていた。たとえば

「貞う。御するに牛三百」

「癸巳貞う。父丁に御するに、それ五十小宰」

『史記』の周本紀によれば、西周王朝をひらいた周族の始祖は后稷といい、農耕を好んだ。

「周后稷，名弃。……其游戲，好種樹麻……及為成人，遂好耕農……」

以上2つの事実こそ、鼎と殷がそれぞれ西周青銅器の中で特に重んじられたことの有力な理由と考えてよいのではなからうか。

殷時代の王室および貴族における祖先祭祀重視の伝統は、西周時代の王室および貴族に受け継がれた。金文から明らかなるところである。その際、牛や羊の肉は祖先祭祀に欠かせない供献の食物として受け継がれたのであろう。そこで、鼎は西周時代において重んぜられた。

祖先祭祀の重視ということから、西周王室と貴族のあいだでは、周族の始祖の後稷への尊崇の表明として祖先祭祀への穀物の供献が大事とされるに至り、これが殷の重用となったのであろう。

出土した点数からみると、殷時代において、鼎

は西周時代と同じく数ある青銅器の器種の中で多くつくられた部類に入るが、殷は入らない。西周時代の殷に当たるのが殷時代では爵や觚といった酒器である（前掲郭氏著書の表一～表五）。

#### おわりに

西周金文と青銅器この両者の関係は、なかなかつかみどころがない。しかしながら、西周青銅器を知るためには西周金文に目を向けずには済まない。この小文では、ひとまず西周金文を極めて単純なかたちで取り上げてみた。今後、さらに詳しく西周金文と青銅器との関係を追究してみたい。

最後に断わり書きを一つ。この小文では繁瑣になるのを避ける目的から西周青銅器で通したが、正確には、この小文で論じたのは西周青銅器の中の青銅彝器である。

#### 参考文献

白川静『金文通釈』（「白鶴美術館誌」第1輯～第56輯 白鶴美術館 1962年～1984年）  
郭宝鈞『商周銅器群綜合研究』文物出版社1981年

#### 挿図出典

第1図 甲骨文 郭沫若『卜辞通纂』 科学出版社  
1983年 第七三五片  
金文 上海博物館『上海博物館藏青銅器』  
1964年 53. 師 簋  
第2図 同 上 29. 大孟鼎  
第3図 上 同 上 34. 無名  
下 同 上 56. 虎 殷  
(7班・佐倉第三事務所)

## 佐原市大倉発見の平安時代火葬墓について

鈴木文雄

### 1. はじめに

ここで紹介する資料は、1984年12月に佐原市大倉の梨畑で土地所有者の鎌形甚一郎氏が耕作中に発見し、近隣の藤株台遺跡で調査をおこなっていた筆者が記録した平安時代火葬墓の報告である。

### 2. 位置と地形（第1図、第2図1・2）

出土地点は佐原市大字大倉山毛<sup>さんげ</sup>2226-4の梨畑で、佐原市の中心部から東へ約5kmの位置にある。利根川下流に面した樹枝状台地の南東斜面近くの平坦面（標高41m）に位置する。